

理学部は今

No.31 June 2012



大学生活のスタートは、フレッシュな笑顔から。
(地質科学科)

CONTENTS

■学部長挨拶 工藤久昭 (理学部長)	2	・西川周一 教授 (生物学科)	4
■後援会長挨拶 山田貴子	3	・マドスーダン サティッシュクマル 教授 (地質科学科)	5
■理学部後援会の事業報告と事業計画	3	・奈良間千之 准教授 (自然環境科学科)	5
■平成23年度卒業生進路状況および 平成24年度入学者数	3	・石崎智美 助教 (自然環境科学科)	5
■新任教員紹介 ・摂待力生 教授 (物理学科)	4	■各学科ニュース	6
・梅林泰宏 教授 (化学科)	4	■職員異動	8
		■第73回国立大学法人8大学理学部長会議開催	8
		■理学部コロキウム開催予定	8
		■これからの行事予定	8

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>
発行/新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会



知る楽しみ

—理学部長就任にあたって—

谷本前理学部長の自然科学系長就任に伴い、その後を受け、理学部長を引き継ぐことになりました。はなはだ非力ではありますが、皆様のご協力を得まして活力ある学生を育成できる理学部に貢献したく思っていますので、よろしく願い申し上げます。

昨年の東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故により、これほど科学・技術が根本から問われたことはないように思えます。私事ながら、放射性物質を研究対象としていることもあり、放射能に関して意見を求められたことがしばしばありました。その際最も強く感じたことは、如何に科学的に正しく理解することが必要かということでした。

理学部は基礎科学を学ぶ学部です。基礎科学は数理やミクロな世界から宇宙に至るまでの自然の仕組みを解明する学問です。それは純粋な知的興味から真理を探究することに端を発します。知る楽しみが原動力です。この原動力により、これまでの蓄積された知識を基にして自由な発想のもと、論理的思考により本質を見極め、自然の仕組みを理解するのです。純粋に知的好奇心から学問ができるのは、学生時代だけです。大いに楽しんでいただきたく思います。

今、社会で求められているのは「生涯学び続け、どんな環境でも勝負できる能力」です。この能力は、まさに知る楽しみに目覚め、自らが自主的に勉学することによって培われるものです。現在、大学生の勉学時間が少なく、思うような学習ができていない状況であるとの声が聞こえています。そのため、中央教育審議会では「学生の学修時間の増加・確保による主体的な学びの確立」ができるような体制作りをせよというような意見も出ています。学問をする楽しみを習慣付けることによりこのような問題は解決できるはずで、学習相談室の充実など、そのための

理学部長 工藤 久昭



手助けをするような体制を整えたいと思います。

豊かな人格形成のためにはコミュニケーション能力が必要不可欠なものと考えます。学生同士、大学院生も含めた上級生、およびアドバイザー教員との対話を通しての相互理解はその第1歩です。様々な機会を設定して充実したものにしたいと思っています。また、異文化の理解と英語コミュニケーション能力の向上を図り、国際的な視野に基づいた思考ができる能力を身に着けることは、これからのグローバル化社会に対応していくためにはなくてはならないものです。留学生を囲む会や国際交流姉妹校との交流会などできるだけ数多くの機会を提供していきたいと考えています。

「理学部の教員が教育と研究に思う存分力を発揮できて、はじめて学生の活力も引き出せると考え、教育研究条件の改善を進めてきました」という前学部長谷本先生の路線を継承し、元気な教員と活力ある学生の新潟大学理学部としたいと考えています。

理学部では、これまで長く理学部のために貢献されてきました5人の先生方が定年退職されました。一方、昇任された先生と新たに赴任されてきました先生方を合わせますと11人になり、先生方の大幅な交代がありました。今年度も8人の先生が定年退職される予定です。また、長年それぞれの学科の事務を担当されてきました職員の方の交代も多く、理学部の教職員スタッフが大きく様変わりする時期に当たります。学生の皆さんが気持ちよく勉学に専念できるよう、教職員一同、気持ちを新たに努めていく所存でございます。

後援会の皆さまには、このような状況をご理解いただき、一層のご支援をお願いいたします。



後援会長挨拶

後援会長 山田 貴子



会員の皆様には、お健やかにお過ごしのことと存じます。

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。またご進級された学生の皆様、おめでとうございます。保護者の皆様にも心からお慶び申し上げます。

日頃より、先生方、事務局の皆様には学業のみならず、大学生活が円滑に行われるようご指導、ご尽力を頂いていることに感謝申し上げます。

この度、後援会会長を務めさせて頂くことになりました山田と申します。大役ではございますが、この後援会のためにできる限り励みたいと存じますので、よろしく願い申し上げます。

昨年の東日本大震災により被災された方もいらっしゃるものと存じます。被災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます。この地震および津波被

害からの復興再生に向けて、あらためて家族の絆、地域・社会の絆の大切さを感じ、強さが求められている昨今であります。

学生の皆様には、人との関わりを大切にしながら大学生活を通して知識はもちろんのこと、友情をはぐくみ、ときには切磋琢磨し、人間性を磨くなど、多くのことを学び、貴重な体験を積み、学生生活が実り多く有意義なものとなるよう願っております。

大学での教育は学生と教員の皆様の関わりだけでなく、学生を温かく見守る保護者の皆様の役割も重要であります。学生・大学・家庭それぞれが連携し合い、後援会の目的としてもありますように、「本学部と家庭との連絡を緊密にするとともに、学部の教育活動を援助し、もって大学教育の理想達成に寄与する」ために会員の皆様のご指導、ご支援を頂きたいと思っております。

後援会の活動のために皆様のお力をお貸し下さいますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。



理学部後援会の事業報告と事業計画

理学部後援会理事会が3月30日(金)に開催され、平成23年度の各種事業の報告と、平成24年度の各種事業計画が承認さ

れました。なお、平成24年度の定期総会が4月5日(木)に開催され、今年度の各種事業計画が全会一致で承認されました。

平成23年度 理学部後援会事業報告

- 1 定期総会の開催**
平成23年4月5日(火) 11時から
新潟大学理学部B303講義室
- 2 各種事業**
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生関係
 - ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞)
 - ② 大学祭援助
 - ③ 学生用設備充実の援助
 - (2) 学部教育事業関係
 - ① 特別講演会の開催、学生用図書購入、新入生合宿研修、野外実習及び臨海実習等の援助
 - ② 学生インターンシップ協力事業所との懇談会への援助
 - ③ 国際交流事業関係等への援助
 - (3) 卒業祝賀会関係
平成24年3月23日(金) 東映ホテルで開催
参加者238名
 - (4) その他
広報活動として「理学部は今」を年3回発行
- 3 理事会の開催**
平成24年3月30日(金) 17時30分から理学部小会議室

平成24年度 理学部後援会事業計画

- 1 定期総会の開催**
平成24年4月5日(木) 11時から
新潟大学理学部B303講義室
- 2 各種事業**
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生関係
 - ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞)
 - ② 大学祭援助
 - ③ 学生用設備充実の援助
 - (2) 学部教育事業関係
 - ① 特別講演会開催への援助
 - ② 学生研修、実験・実習への援助
 - ③ 国際交流事業関係等への援助
 - ④ インターンシップ関係等への援助
 - (3) 卒業祝賀会関係
卒業式当日に卒業祝賀会を開催 平成25年3月25日(月)
(参加者: 卒業生、保護者、同窓会役員、後援会役員、教職員)
 - (4) その他
広報活動として「理学部は今」を年3回発行
- 3 理事会の開催**
平成25年3月29日(金) 17時30分から理学部小会議室(予定)



平成23年度卒業生進路状況および平成24年度入学者数

	数学科	物理学科	化学科	生物学科	地質科学科	自然環境科学科	計
平成24年度 入学者数	37	47	36	21	26	31	198
3年次編入学	3	2	4		2		11
進学	13	35	17	17	13	10	105
教員(含む非常勤)	9	1					10
公務員	5		4	1	2	3	15
平成23年度 卒業生進路状況	食品・飼料			3			3
	繊維・化学・石油				1		1
	電力・ガス					1	1
	製薬						0
	建設・建設材料				1	1	3
	金属・機械	1		1			2
	電気・精密機械			1			1
	情報・通信	1					2
	印刷・出版						0
	商業・サービス			1	1		5
	金融・保険	2	1	1	1		5
	教育学習支援						0
	運輸・その他	1	2	1		1	3
	その他	8	7	6	3	6	4
合計	40	46	32	27	24	26	195

注) 平成24年5月1日現在の状況です。

* 留学生を含む



新任教員紹介



物理学科 教授
摂待 力生

この4月に物理学科に着任しました摂待力生です。17年間過ごした大阪大学から赴任してまいりました。よろしくお願ひいたします。生まれと育ちは北海道で、大学院学生の頃は仙台市で過ごしていました。そのため雪と寒さには慣れており、つもりでしたし、知り合いからも新潟市内はほとんど雪は積もらないと聞いていました。しかしこの冬は特別だったようで、赴任前の2月に車で住居探しに家族と新潟に来たときには大雪となり、重くて湿った雪に往生しました。また、4月には大風で電柱が何本も倒れ、車が畑に転がるなど、家族には新潟に強い印象を残したようです。

さて、私の研究テーマは強相関電子系とよばれる物質の磁性と超伝導で、特に希土類化合物の単結晶育成と、極低温・強磁場・超高压下での物性実験を行っています。最近では工業的・社会的に脱希土類元素を目指した物質開発の流れもありますが、希土類元素を含んだ物質群が物性研究者にとつ

て魅力的な研究テーマを提供しつづけていることには変わりありません。希土類化合物の特異な性質は、希土類元素の持つ4f電子の局在性と遍歴性にあります。この2つの相反する性質を他の元素との組み合わせや、磁場・圧力により制御し、新しい物性を引き出せるところに研究の面白さがありますし、新たな応用へとつながるものと期待しています。結晶育成の醍醐味の一つに、自分が育てた結晶が思いもよらない物理の発展の種となることがあります。なかなか思い通りにいかないこともある点を含め、結晶育成には、学生を育てることに通じるところがあるようです。

現在は学生たちと結晶育成のための装置作りから始めている段階で、結晶が出来るのはまだまだ先ですが、この装置で結晶が出来たときの学生の喜ぶ顔を楽しみに、学生たちと毎日汗を流しています。

本年4月1日付けで理学部担当教授を拝命いたしました梅林と申します。生まれも育ちも九州は博多で、(途中、3年ほど民間企業に勤めた期間を除けば)、前任校も九州大学と、根っからの九州男児で新潟はまだ右も左もわかっておりません。とはいえ、新潟には不思議な縁があるようで、修士時代に初めて口頭講演したのは、本学で開催された学会でしたし、この約20年後、同じ学会で学術賞をいただき、講演させていただいたのも新潟(会場は、朱鷺メッセ)でした。

私の専門分野は、溶液化学と呼ばれる化学の一分野で、化学のなかでも少数派になるのかもしれませんが、一方で、物理学や生物学、地球惑星科学とも密接な関係にある境界領域でもあります。授業担当は、主に分析化学になりますが、これもまた物質・材料科学や生命科学、地球や宇宙を含めた環境科学のいずれの自然科学においても必須の化学分析、物理分析を担う基盤科学といえると思います。この意味では、改めて身の引き締まる思いです。

最近の興味の対象は、イオンのみからなる常温で液体のイオン液体と呼ばれる新しい液体に関するものです。イオン液体は、正の電荷を帯びた陽イオンと負の電荷を帯びた陰イオンで構成される、塩化ナトリウムのような、所謂、塩であり、蒸気圧が実質的に無視できる点で環境負荷が小さいと考えられ、ごく最近、生体中で利用されるイオンを構成イオンとして用いるバイオコンパチブルなイオン液体も注目されています。私の研究課題は、このイオン液体について、化学反応や分離・精製の“場”として、或いは、イオン伝導体としての新たな特性を見出し、機能に結びつけること、さらに、従来知られていないイオン液体に特異的な化学反応やイオン伝導の機構を分子・原子のレベルで解明することです。

自然科学の基盤であり、境界領域でもある溶液化学の最先端に関する教育研究を通して、微力ながら本学の発展と本学学生の成長に貢献したいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。



化学科 教授
梅林 泰宏



生物学科 教授
西川 周一

4月に生物学科に着任しました西川周一です。よろしくお願ひします。大学院まで東京で過ごしたのち、19年の名古屋での生活を経て新潟にやってきました。途中2年ほどシカゴで過ごしたことがあります。これを除けばこれまでずっと減多に雪の降らない地方での生活でした。着任早々4月に入ってからの雪に驚いております。

専門は細胞生物学・植物生理学です。これまで細胞内の小器官(オルガネラ)、特に小胞体がどのようにして形成・維持されているかを研究してきました。小胞体は分泌タンパク質の合成をはじめ様々な機能をもつオルガネラで、植物細胞内では最大の表面積をもっています。植物細胞の小胞体は、環境の変化に応じて様々な分化します。動くことができない植物の環境適応で、このような

小胞体の機能分化がどのような役割をはたしているのか、これを明らかにしようとする研究を進めています。

思えば、私は学部時代からずっと理学部で研究を行ってきました。理学部での研究は、役に立つかどうかはひとまず置いて、その本質の解明を目的として研究を進めることにあると思います。下村脩さんも、30年後に役に立つとは思わず、クラゲがどうして発光するのかを知りたくて研究を進め、GFPを見つけられました。このような研究の中から、次の時代を拓く新しい発見があるのだと思います。大切なのは、本質が何かを常に考えながら研究を進めること、これを若い学生諸氏に伝えながら、次世代を担う人材を育てていきたいと思っています。よろしくお願ひいたします。



地質科学科 教授
**Madhusoodhan
 Satish Kumar**
 マドブーダン
 サティッシュ クマール

I was born and brought up in a small city of Thiruvananthapuram, in southwestern state of Kerala in India. I did my schooling and university up to my master course in India and was fortunate to receive the prestigious "Monbusho scholarship" from the Japanese Government to pursue the doctoral course at Osaka City University. After completing my doctoral course, I have joined as a faculty member at Shizuoka University and worked there for thirteen years. During this period, I was privileged to join the Japanese Antarctic Research Expedition twice to conduct geological studies in Antarctica. Being born and brought up in a very old and stable "continent", from my childhood I have developed a keen interest to know the secrets behind the formation and evolution of continents in the history of Earth. Continents provide us not only a safe place to live but also is full of resources that sustain human life. During the past two decades, I have been studying about how the supercontinent of "Gondwana" has formed and how it has affected the Earth's environment at that time. Especially, India-Sri Lanka-Antarctica connection to this supercontinent is interesting because it has formed at a time when

large animals have suddenly come into existence. Geological studies combined with laboratory experiments to understand the formation and evolution of continents and supercontinents in the past is being carried out with the help of a variety of geochemical tools, such as isotopes, from remaining whispers of geological record. In this respect, I am honored to join the Department of Geology of Niigata University. As far as I am aware, this is one of the best Geology departments in Japan, where fundamentals of geology are taught thoroughly in the undergraduate level, and research in the graduate level is flourishing well. I wish to continue my ambition to understand the Earth in more depth, and convey them to the younger generation in my full capability. It is also my hope to expand the horizons of geological research to places where we can spread our wings without any limitations or restrictions. In this age of voyages like "hayabusa", our dreams can come true in all aspects. Let us work together for a common cause of building a peaceful and safe place to live together in our Earth and perhaps beyond! Looking forward to you warm cooperation and encouragements.

京都の総合地球環境学研究所から自然環境科学科に赴任してまいりました奈良間千之（ならまちゆき）です。静岡の自然豊かな大井川周辺で育ち、その後、東京、名古屋、ノルウェーのオスロ、京都を経て新潟へと移動し、はじめて日本海側で暮らすことになりました。

私は、中央アジアやヒマラヤの山岳地域に分布する氷河の変動や災害に関する研究に取り組んでいます。氷河を研究するきっかけは学部生時に訪れた中央アジアのパミールでした。はじめて歩く氷河は岩屑に覆われ、土砂で汚れたように見え、これまでの青く澄んだイメージと異なるものでした。さらに、氷河上やその周辺の工事現場を思わせる土砂の堆積の連なる光景は私の気分を高揚させるほど迫力あるものでした。あれからもう15年、毎年中央アジアの山岳地帯で氷河の調査を続けています。

近年、地球規模の気候変化が報告されています。中央アジアの氷河の変化を衛星画像解析やフィールド調査で調べたところ、氷河は縮小傾向であり、

特に人々の暮らす山脈外縁部でその縮小が大きいことがわかりました。乾燥・半乾燥地域である中央アジアでは、氷河は夏の河川に融け水を供給する貴重な水資源です。大都市や農地が広がる天山山脈の西部では、繁農期である夏が乾季にあたるため、近年の氷河縮小による将来的な河川水の減少が懸念されています。もう一つの影響として、氷河の縮小により融けた水が氷河前面にたまってできる氷河湖が多数出現しています。これら氷河湖はたびたび決壊しており、発生した洪水により下流の村々では甚大な被害が報告されています。

このような海外調査では、重い調査機器をもって山岳地域を歩くため、大変な思いやハプニングも多々あります。それと同時に、とても美しい風景に出会うことができます。新潟県にも素晴らしい自然があり、このようなフィールドへ学生たちと出かけ、研究の楽しさを伝えるとともに、世界的視野を持つ人材育成や研究教育に努めていきたいと思えます。



自然環境科学科 准教授
奈良間 千之



自然環境科学科 助教
石崎 智美

この春、自然科学研究科に着任しました石崎智美です。大学・大学院・研究員生活を北海道の札幌で過ごし、10年ぶりに出身地である新潟に戻ってきました。

私は高校生のころ生物を好きになり、大学生の時に、生物と環境とのかかわりを解明する生態学に興味を持つようになりました。自然界で、生物は刻々と変化する周囲の環境に適応しながら生きています。生物を取りまく環境には、気候や地形などの物理的環境に加え、他の生物との相互作用によって作られる環境（生物的環境）があります。それぞれの生物は、長い進化の過程を経て周囲の物理的・生物的環境に適応してきました。私は、特に生物どうしの相互作用に着目して、生物がどのようにして周囲の生物的環境へ適応してきたのか、また、獲得した適応能力を使ってどんな生き方をしているのかを知

りたいと思い研究を行っています。生物どうしの相互作用は生態系を構成する重要な要素です。しかし、自然界には相互作用そのものやその維持メカニズムが知られていない生物間相互作用がたくさんあります。それらがどのように形成され、相互作用する生物にどのような影響を与えているかを解明することは、生態系を維持するメカニズムや生物多様性を生み出す原動力を理解することにつながります。

私は研究者としてはまだまだ駆け出しの身であり日々研究の楽しさとともに難しさにも直面していますが、故郷・新潟の自然を対象に、まだ知られていない生物どうしのつながりや生物の生き方を解き明かしていきたいと思っています。そして、このような研究を通して、学生の方たちとともに自然の雄大さと大切さを国内外に発信していきたいと思えます。



各学科ニュース

数学科

数学科新入生同士や数学科教員との交流と親睦を目的として、平成24年度数学科新入生合宿研修を4月21日(土)と22日(日)に、新潟県立青少年研修センターで開催した。参加者は、新入生36人と教員6人であった。21日の8時30分に大学に集合し、バスで約20分のところにある研修所に到着後、早速研修を開始した。午前中は自己紹介と講義履修上の注意。入学後2週間経っているが、いろいろな言葉が飛び交う楽しい自己紹介だった。午後は、レクリエーションの時間。体育館で、バスケット、バドミントン、ドッジボール、バレーボール、卓球などを楽しんだ。夕食後に、懇親会をおこなった。ショートコントや特技などを披露する学生があり楽しいときであった。今年度は、声の大きな新入生が多いようだ。夜10:30に就寝。22日は、6時に起床し、ベッドの整頓をし、7時から朝のつどい。ラジオ体操と簡単なゲームをした。左右前後、言葉と動きを別々にするのは難しい。9:00から2つの講義。寝るのは失礼だからと全力で起きている。何時に寝たのだろうか。昼食後、アンケートに答えてもらい帰途に就いた。例年になく盛り上がった会であり、特に食事の評判が良かった。大学生生活がスムーズにスタートできることを期待している。



物理学科

この4月、物性実験分野の教授として摂待力生先生が着任されました。摂待研究室では大学に既存の設備をそのまま使うのではないため、研究室の学生のご指導と並行して実験装置を立ち上げる必要があります。このようにご多忙なため、お見せ下さった実験装置はまだ、梱包されたままでした。なお、今年度のオープンキャンパス模擬授業の講師に、摂待先生を予定しています。多くの方々のご来場を心待ちにしております。

先の震災に伴う原発事故以来、筆者の放射線に対する理解が非常に頼りないものであることを実感する機会が、一般の方々を対象とする模擬授業の場として幾度かありました。物理学科では昨年度末、学科予算で放射線計測器を購入しましたので、このような広報活動に役立てたいと思います。なお、計測器の機種選定や上記の広報活動において、原子核実験分野の大坪隆先生に大変お世話になったことをご報告いたします。



◀物理学科所有の放射線計測器。小さいけれど放射線のエネルギー分布も表示できる優れものです。



摂待先生ご自慢の実験装置のお披露目まで、もう少しお待ち下さい。

化学科

化学科とグリーンケミストリー連携教育研究センターは、昨年度「放射能と放射線」についての学習セミナー(5/16、10/22)、小中学生向け「化学実験体験講座」(10/22、3/18)、外部講師による「マイクロスケール化学実験」の講義・演示実験と高校教員らによる体験実験(3/3)、研究シンポジウム(3/8、9)、など多くの行事を開催しました。

新年度4月から物理化学分野の生駒先生が教授に昇進しました。また分析化学分野の教授として梅林先生が九州大学より赴任されました。梅林先生自身による紹介が別稿にありますのでそちらもご覧下さい。お二方の今後の活躍が期待されます。また、化学科の職員として新しく本間さんが採用されました。これから、学生・教員ともにお世話になります。この様に化学科では構成員がかなり変わりましたが、入学式後のガイダンス、新入生歓迎会、たてこんなど新しい年度の行事をいつものように行っています。



生物学科

生物学科では、昨年度末に細野正道先生、菊山宗弘先生のお二人の先生が定年退職されました。細野先生のご専門は「免疫生物学」であり、イモリやマウスを用いて、生き物の複雑な免疫システムの解明に挑んでこられました。菊山先生のご専門は「植物生理学」であり、機械刺激に対する植物の反応を、車軸藻類（長さが数cmにも達する細胞を持つ）を使用して研究されてきました。両先生は教育にも非常に熱心で、多くの学生に慕われていました。細野先生、菊山先生、本当にお疲れ様でした。

本年度当学科には、21名の新入生が入学しました。また、新たに教授として西川周一先生がご着任されました（詳しくは新任教員紹介の欄をご覧ください）。そして、4月27日の夕方には毎年恒例の新入生との懇談会が開催されました。新入生全員と在学学生および教員が大会議室に集まり、お弁当を堪能しながら、新入生の自己紹介や教員の「私の学生時代」というお題のスピーチで盛り上がりました（写真はその様子）。この会をきっかけに、新入生が早く生物学科に溶け込んでくれることを願っております。また、7月13日には毎年恒例の夏の懇親会が企画されています。学部学生から大学院生および教員が一同に会する生物学科恒例の懇親会です。今回はこの模様についてご報告致したいと思います。



自然環境科学科

自然環境科学科はこの春26名の卒業生を見送り、31名の新入生を迎え入れて、それぞれが新しい生活を始めることになりました。生活環境が変わるのは卒業生、新入生だけではなくありません。新4年生は課題研究に向けてそれぞれ配属先研究室での新生活が待っています。特に現4年生は新カリキュラムの最初の学年で、今まで選択科目であった課題研究が必修科目となっています。研究活動を一年間挫折することなく、最後までやり遂げることを期待して、エールを送りたいと思います。

新しく迎えた学科メンバーは学生だけではなくありません。この4月には奈良間千之先生（地形学）、石崎智美先生（生態学）を新しいスタッフとして迎え（新任紹介の欄を御覧ください）、4月の新歓コンパでは新1年生に混じって新しい学科メンバーとして歓迎を受けました。また、松岡先生が准教授から教授に昇任されました。松岡先生は今後教育・研究者としてだけでなく、自然環境科学科の舵取りを担う重要なスタッフとしての活躍が期待されます。



地質科学科

地質科学科では、昨年度末に教授・宮下純夫（岩石学）が定年退職し、その後任としてサティッシュ・クマールを迎え、新しい教員構成で新年度をスタートさせました。新1年生および新編入学生計28名は、さっそく4月下旬に新入生ガイダンスを兼ねた1泊2日の野外実習にでかけました（写真は室内での研修風景）。当学科の入学生のほとんどは高校で地学を履修していませんので、ごく基本から始めて、順を追って地質学の深い世界に徐々に突っ込んでいけるよう、1年次からさまざまに工夫した野外実習を実施しています。2年生・3年生は地質学の真の面白さがだんだんにわかって来るころです。一層の学問への没入を期待します。4年生は全員、4月から大学生活の総仕上げとなる課題研究（卒論）を始めました。今年の卒論テーマも、対象は新潟県内から、東北地方の震災に関連した地質現象、さらに海外での調査まで非常に幅広く、それぞれ自分の選んだテーマにじっくり取り組んで、探求する楽しみを味わい尽くしてくれるものと期待しています。一方で4年生は、就職や大学院進学など進路に関して各自格闘しつつ、自分の道を歩もうと努力しています。教職員は遠巻きにそのサポートができるだけですが、皆の努力が実を結ぶよう心より願っています。本年も保護者の皆様のご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。



新年度 地質科学科の新メンバー参加の野外実習授業



職員異動

本年4月に理学部事務スタッフの人事異動がありました。菅原聖哉学務係長は、自然科学系農学部事務室学務係長からの配置換えで、学務事務総括、入学試験関係、インターンシップ関係などの業務を担当します。

野城一彦総務係員は、総務部人事課からの配置換えで、予算管理・授業料・助成金などの業務を担当します。高田頌技術職員は、4月1日付け新採用で、生物学実験の指導補助・実験室の管理運営等を担当します。

3人とも、教職員の皆さんがより良き教育研究活動を行えるよう、また学生の皆さんが充実した学生生活を送れるよう努力しますので、ご指導ご協力の程よろしく申し上げます。



左から野城係員、菅原係長、高田技術職員



第73回国立大学法人8大学理学部長会議開催

第73回国立大学法人8大学理学部長会議が、5月18日(金)に新潟大学理学部主催で新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて行われました。

会議では、8大学に共通する問題点や学生環境の国際化及び将来展望などについて話し合われました。生憎の天気でしたが、雨の合間に朱鷺メッセの展望台や新潟市歴史博物館の視察を行い、新潟の良さを他大学の先生方にご説明しました。

工藤理学部長、雲崎理学部事務室長をはじめとするスタッフの協力のもと、無事成功裏に会議を終えることができました。



学部長等の記念写真



理学部コロキウムの開催予定

第55回	2012年5月23日(水)	物理学科	第58回	2012年10月24日(水)	化学科
第56回	2012年6月27日(水)	数学科	第59回	2012年11月28日(水)	生物学科
第57回	2012年7月25日(水)	地質科学科	第60回	2013年1月23日(水)	自然環境科学科

これからの 行事予定

8月9日(木),8月10日(金)	新潟大学オープンキャンパス	9月20日(木)	秋期卒業式
8月11日(土)~9月30日(日)	夏期休業	10月1日(月)	第2学期授業開始
9月4日(火)	3年次編入試験		

オープンキャンパスのイベント等の詳細は新潟大学および理学部のホームページに掲載されます。

お問い合わせ 窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部学務係

TEL : 025-262-6106

FAX : 025-262-6354

Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。